

主要産地における平成28年産水稻の収穫量及び作柄概況等について 第10報（4月25日現在）

作成：公益社団法人米穀安定供給確保支援機構情報部（平成29年4月26日）

全 国 道 府 県	収穫量（主食用）					作況		品質概況等		参考			
	平成28年産 収穫量 ①	前年産収穫量 ②	前年産 との比較 (①-②)	平成28年産 生産数量目標 との比較	平成28年産 自主的取組参 考値との比較	作況指数 (28年産)	前年産 との比較	平成28年産 水稻うるち玄米 1等米比率 (29年3月末現在)	平成27年産 水稻うるち玄米 1等米比率 (28年3月末現在)	生産数量目標			平成29年産 自主的取組 参考値 ④
										平成29年産 ③	前年産 との比較	増減率	
全国	t	t	t	t	t			%	%	t	t	%	t
全国	7,496,000	7,442,000	▲ 54,000	66,000	146,000	103	3	83.4	82.4	7,350,000	▲ 80,000	▲ 1.1	7,330,000
北海道	545,500	559,600	▲ 14,100	4,000	9,831	102	▲ 2	89.7	92.8	535,669	▲ 5,831	▲ 1.1	534,212
青森	222,300	229,800	▲ 7,500	▲ 17,577	▲ 14,994	104	▲ 1	93.7	93.7	237,294	▲ 2,583	▲ 1.1	236,649
岩手	254,300	269,400	▲ 15,100	▲ 14,021	▲ 11,132	102	▲ 3	97.9	95.8	265,432	▲ 2,889	▲ 1.1	264,710
宮城	352,300	348,400	3,900	7,394	11,107	105	2	90.3	83.3	341,193	▲ 3,713	▲ 1.1	340,264
秋田	409,600	419,400	▲ 9,800	▲ 3,492	956	104	1	92.3	91.1	408,644	▲ 4,448	▲ 1.1	407,532
山形	345,300	354,300	▲ 9,000	4,470	8,140	103	0	95.4	94.8	337,160	▲ 3,670	▲ 1.1	336,243
福島	333,600	342,600	▲ 9,000	▲ 2,333	1,284	102	1	94.9	90.6	332,316	▲ 3,617	▲ 1.1	331,412
茨城	350,100	345,400	4,700	16,324	19,918	99	3	91.4	84.3	330,182	▲ 3,594	▲ 1.1	329,284
栃木	295,300	287,300	8,000	▲ 208	2,974	102	4	94.4	90.6	292,326	▲ 3,182	▲ 1.1	291,531
埼玉	154,100	152,200	1,900	4,441	6,053	101	4	87.2	68.2	148,047	▲ 1,612	▲ 1.1	147,644
千葉	295,900	297,500	▲ 1,600	52,036	54,661	102	1	90.2	88.8	241,239	▲ 2,625	▲ 1.1	240,582
新潟	589,700	539,600	50,100	73,963	79,516	108	11	84.4	79.2	510,184	▲ 5,553	▲ 1.1	508,796
富山	191,300	191,200	100	7,628	9,605	106	3	91.0	91.4	181,695	▲ 1,977	▲ 1.1	181,200
石川	123,900	123,200	700	1,587	2,904	104	3	89.6	87.5	120,996	▲ 1,317	▲ 1.1	120,667
福井	126,300	123,800	2,500	2,176	3,513	104	5	89.7	86.7	122,787	▲ 1,337	▲ 1.1	122,453
長野	197,800	194,500	3,300	5,867	7,933	101	4	97.2	96.0	189,867	▲ 2,066	▲ 1.1	189,350
滋賀	161,300	158,500	2,800	2,559	4,268	104	4	75.2	73.8	157,032	▲ 1,709	▲ 1.1	156,604
兵庫	177,400	178,900	▲ 1,500	▲ 1,118	804	100	1	63.7	66.4	176,596	▲ 1,922	▲ 1.1	176,115
岡山	155,600	149,500	6,100	▲ 1,261	428	101	5	80.2	71.7	155,172	▲ 1,689	▲ 1.1	154,750
広島	124,300	121,700	2,600	▲ 4,285	▲ 2,901	102	6	84.3	88.0	127,201	▲ 1,384	▲ 1.1	126,855
山口	101,400	100,700	700	▲ 6,201	▲ 5,043	102	5	76.0	75.2	106,443	▲ 1,158	▲ 1.1	106,153
愛媛	72,100	71,200	900	▲ 1,033	▲ 245	102	4	43.1	44.1	72,345	▲ 788	▲ 1.1	72,148
高知	53,100	52,800	300	3,563	4,097	100	4	18.8	16.6	49,003	▲ 534	▲ 1.1	48,870
福岡	177,400	172,300	5,100	▲ 3,126	▲ 1,182	100	5	27.2	38.0	178,582	▲ 1,944	▲ 1.1	178,097
熊本	171,300	171,500	▲ 200	▲ 15,993	▲ 13,977	102	5	37.3	51.0	185,277	▲ 2,016	▲ 1.1	184,773
宮崎	77,200	74,700	2,500	▲ 15,403	▲ 14,406	100	7	41.4	61.1	91,606	▲ 997	▲ 1.1	91,357
鹿児島	97,600	95,700	1,900	▲ 12,287	▲ 11,104	100	5	40.4	66.4	108,704	▲ 1,183	▲ 1.1	108,408

注：更新箇所について、前報より増加した箇所は二重下線で、減少した箇所は下線で表した。

収量構成要素、作柄及び品質等の概況	
道府県	自治体等公表資料（公表資料の抜粋）
北海道	<ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、6月上旬から中旬にかけて日照時間が平年を下回ったものの、7月には天候が回復したことから「平年並」となった。登熟は、8月下旬から9月上旬にかけての日照不足等の影響でやや緩慢となったものの、8月上旬から中旬にかけて概ね高温に経過したことから「やや良」となった。なお、登熟期の台風通過による影響は限定的であった。この結果、10a当たり収量は551kgとなった。（北海道農政事務所 12月2日付）
青森	<ul style="list-style-type: none"> ・水稲10a当たり収量は、全もみ数が「平年並」となり、出穂期以降、概ね気温・日照時間が平年を上回って経過、9月中旬以降も気温が平年を上回り、登熟が「やや良」で、604kgとなった。（東北農政局 12月2日付） ・水稲作況（収量調査） （黒石）「つがるロマン」は、全重、わら重とも平年より軽く、精玄米重は平年比92%と少収であった。玄米千粒重は平年比101%と平年並であった。また、「青天の霹靂」は、全重、わら重とも前年より軽く、精玄米重は前年比89%と少収であった。玄米千粒重は前年比98%と概ね前年並であった。 （十和田）「まっしくら」は、全重、わら重とも平年より軽かったが、精玄米重は平年比99%と平年並であった。玄米千粒重は平年比99%と平年並であった。（青森県産業技術センター農林総合研究所 11月24日付）
岩手	<ul style="list-style-type: none"> ・水稲10a当たり収量は、全もみ数が平年に比べ「やや少ない」となり、出穂期以降、概ね気温・日照時間が平年を上回って経過、9月中旬以降も気温が平年を上回り、登熟が「やや良」で、540kgとなった。（東北農政局 12月2日付）
宮城	<ul style="list-style-type: none"> ・水稲10a当たり収量は、全もみ数が「やや多い」となり、登熟は、全もみ数がやや多かったものの、出穂期の気温・日照時間が平年を上回って経過し、9月中旬以降も気温が平年を上回ったことにより「平年並」で、554kgとなった。（東北農政局 12月2日付） （登米）・県北部の作況指数は「105」の良となっている。（12月2日公表）。玄米品質が良好で、JAみやぎ登米管内の1等米比率は1月11日現在で90.99%（うち）と昨年より高くなっている。・県全体で着色粒（カメムシ類）を原因とする落等率は、総検査数量の3.7%（平年は3.0%）であった。落等要因は、「充実度不足」、「着色粒（カメムシ類）」、「心白・腹白」が主な理由となっている。・登米市全体では、落等要因の第1位は「着色粒（カメムシ類）」、次いで「充実度不足」の順となっている。・水稲の品質を左右した要因 <ol style="list-style-type: none"> 1) 斑点米カメムシ類 カメムシ類による斑点米被害の多かったほ場については、イネ科牧草ほ場が隣接していたり、イヌホタルイやヒエ類等の雑草が水田内に多く残存したことにより、水稲の出穂前にはカメムシ類の密度が高くなっていったと考えられる。 2) 充実度不足 充実度不足の原因はいろいろ考えられるが、m当たり粒数が多めであったこと、倒伏による充実不足や刈り遅れ、紋枯病による充実不足などがあげられる。 3) 刈り遅れ 28年の出穂後の平均気温の積算による収穫適期は、管内出穂盛期の8月2日出穂の場合、ひとめぼれで9月10日～17日であったが、降雨の影響のため、刈取が始まったのは9月23日、本格化したのは10月3日であった。このため、刈り遅れによる品質低下も見られた。（1月30日付） （石巻）・生育調査圃場収量調査結果では、ひとめぼれは登熟期が高温であったため、白未熟粒の割合は高温傾向であった前年と同程度であったが、前年と異なり日照時間は多かったため、充実度は良好で、充実不足等を示すその他未熟粒の割合は前年より少なかった。・11月末現在の2等以下の格付理由は、充実度不足、着色粒（カメムシ類）、心白・腹白の順に多く、他県と比べて充実度不足と心白・腹白が多い傾向であった。（1月27日付） （栗原）・JA栗っこの一等米は94.5%（12月上旬、うち、倉庫出荷）。主な落等要因は、着色粒（斑点米カメムシ類）。 ・県内のうち米の1等米比率は90.1%。主な落等要因は「充実度不足」、「着色粒（カメムシ類）」、「心白・腹白」。地帯区別の落等理由は、西部丘陵では「着色粒（カメムシ類）」が大半で、県南部等では「充実度不足」、「心白・腹白」の割合が高くなった。（1月10日付） （大崎）・県の収量と玄米品質に影響した主な要因は、刈取前の降雨によって刈取作業が進まず、整粒歩合の低下・白未熟粒を含む未熟粒等の増加を助長したこと。斑点米カメムシ類は8月下旬の発生が多く、加害期間が平年よりも長かったため、着色粒被害が発生したほ場もあった。（12月27日付） （本吉）・管内での聞き取りでは、平年より収量が少ない方が多かった。6月中下旬の寡照の影響が生育量（特に茎数）を確保出来ず、登熟は良好だったものの粒数が少なく、収量が確保出来ない事例が多く見受けられた。（12月12日付）
秋田	<ul style="list-style-type: none"> ・水稲10a当たり収量は、全もみ数が「平年並」となり、出穂期以降、概ね気温・日照時間が平年を上回って経過、9月中旬以降も気温が平年を上回り、登熟が「やや良」で、591kgとなった。（東北農政局 12月2日付） （鹿角）かつの農業協同組合によると、平成28年産あきたこまちの一等米比率は81.5%（11月16日現在）。また、落等原因の大半が斑点米カメムシ類の着色粒によるものだった。（11月18日付） （秋田）定点調査ほにおける収量調査の結果（あきたこまち10地点平均）は、穂数は422本/m²（平年比94%）で平年より少なく、一穂着粒数は72.9粒（同99%）で平年並、m当たり着粒数は30,393粒（同93%）で平年より少なくなった。一方、登熟歩合は91.2%（平年差+7.0）と平年より高かった。粒数は少なかったものの、登熟が良好だったため、玄米重は576kg/10a（平年比100%）と平年並になった。（11月11日付）（秋田県農林政策課）
山形	<ul style="list-style-type: none"> ・水稲10a当たり収量は、全もみ数が平年に比べ「やや多い」となり、出穂期以降、概ね気温・日照時間が平年を上回って経過、9月中旬以降も気温が平年を上回り、登熟が「やや良」で、608kgとなった。（東北農政局 12月2日付）
福島	<ul style="list-style-type: none"> ・水稲10a当たり収量は、全もみ数が「平年並」となり、出穂期以降、概ね気温・日照時間が平年を上回って経過、9月中旬以降も気温が平年を上回り、登熟が「やや良」で、555kgとなった。（東北農政局 12月2日付）

収量構成要素、作柄及び品質等の概況	
茨城	<ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数がやや少なく、1穂当たりもみ数がやや多くなったことから「平年並」となり、登熟は、8月中旬以降の日照不足や降雨の影響により抑制されたことから「やや不良」となった。 ・この結果、県の10a当たり収量は521kgで、前年産に比べ16kg増加した。なお、農家等が使用しているふるい目幅（1.80mm）で選別された作況指数は99となり、作柄表示地帯別では、北部で99、鹿行で100、南部及び西部で98となった。（関東農政局 12月2日付） <p><龍ヶ崎市、11月8日現在> (4月27日移植)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出穂期は平年に比べ「あきたこまち」で3日、「コシヒカリ」では2日早まった。また、台風による倒伏の影響により、登熟期間が平年よりやや長くなり、成熟期は両品種とも平年に比べ1日早かった。 ・あきたこまちは、平年と比較した成熟期の生育は、稈長・穂長・穂数とも並、倒伏程度は大きかった。収量構成要素をみると、穂数・一穂穂数は並だったが、これらの積であるm当たり穂数はやや少なかった。千粒重は重く、登熟歩合はやや高かった。精玄米率は平年比113%と多かった。玄米外観品質をみると、乳白粒が少なかった（▲2.0%）。 ・コシヒカリは、平年と比較した成熟期の生育は、稈長・穂長・穂数とも並、倒伏程度は大きかった。収量構成要素をみると、穂数・一穂穂数は並だったが、これらの積であるm当たり穂数はやや多かった。千粒重はやや重く、登熟歩合は並。精玄米率は平年比108%とやや多かった。玄米外観品質をみると、乳白粒が少なかった（▲3.3%）。 ・ふくまる（平成25～27年までの3年間との比較）は、出穂期は平年より2日早く、成熟期は並。平年と比較した成熟期の生育は、稈長・穂長は並、穂数はやや少なく、倒伏程度は極大であった。収量構成要素をみると、穂数はやや少なく一穂穂数がやや多かったため、m当たり穂数は並。千粒重はやや重く、登熟歩合は並。精玄米率は平年比106%とやや多かった。玄米外観品質をみると、乳白粒が少なく（▲2.6%）、青未熟粒がやや多く（5.3%）、整粒歩合はやや低かった（▲5.8%）。青未熟粒がやや多かった要因として、登熟終盤（8/16）に通過した台風7号による倒伏の影響が挙げられる。 <p>(5月6日移植)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出穂期は「あきたこまち」「コシヒカリ」とも平年より3日早まった。台風による倒伏の影響によって登熟期間が平年よりやや長くなり、成熟期は「あきたこまち」で平年より1日早く、「コシヒカリ」では2日早かった。 ・あきたこまちは、平年と比較した成熟期の生育は、稈長・穂長・穂数とも並。倒伏程度は極大であった。収量構成要素をみると、穂数・一穂穂数・m当たり穂数は並、千粒重はやや重く、登熟歩合は並。精玄米率は平年比106%とやや多かった。玄米外観品質をみると、乳白粒が少なかった（▲2.4%）。 ・コシヒカリは、平年と比較した成熟期の生育は、稈長・穂長・穂数とも並。倒伏程度は大きかった。収量構成要素をみると、穂数・一穂穂数・m当たり穂数は並、千粒重はやや重く、登熟歩合は並。精玄米率は平年比104%と平年並だった。玄米外観品質をみると、乳白粒が少なかった（▲2.5%）。 <p>(茨城県農業総合センター農業研究所 11月16日付)</p>
栃木	<ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数及び1穂当たりもみ数がやや多くなったことから「やや多い」となり、登熟は、8月中旬以降の日照不足や降雨の影響により抑制されたことから「やや不良」となった。 ・この結果、県の10a当たり収量は551kgで、前年産に比べ20kg増加した。なお、農家等が使用しているふるい目幅（1.80mm）で選別された県の作況指数は102となり、作柄表示地帯別では、北部で103、中部で101、南部で103となった。（関東農政局 12月2日付）
埼玉	<ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数が平年並、1穂当たりもみ数がやや多くなったことから「やや多い」となり、登熟は、8月中旬以降の日照不足や降雨の影響により抑制されたことから「やや不良」となった。 ・この結果、県の10a当たり収量は494kgで、前年産に比べ14kg増加した。なお、農家等が使用しているふるい目幅（1.80mm）で選別された県の作況指数は101となり、作柄表示地帯別では、東部で101、西部で102となった。（関東農政局 12月2日付）
千葉	<ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数がやや少なく、1穂当たりもみ数が多くなったことから「やや多い」となり、登熟は、一部台風等の影響が見られたが、概ね天候に恵まれたことから「平年並」となった。 ・この結果、県の10a当たり収量は549kgで、前年産に比べ10kg増加した。なお、農家等が使用しているふるい目幅（1.80mm）で選別された県の作況指数は102となり、作柄表示地帯別では、京葉で102、九十九里及び南房総で103となった。（関東農政局 12月2日付） ・「ふさおとめ」の充実度、整粒歩合、粒ぞろい及び粒形は概ね良いが、玄米白度がやや低い。白未熟粒の混入は全体的に少ない。活青米は適度に混入している。胴割粒、被害粒の混入は比較的少ないが、着色粒が散見される。（精米工 10月17日付）
新潟	<ul style="list-style-type: none"> ・作柄は、田植期から出穂期までは概ね天候に恵まれ、全もみ数は「やや多い」となり、出穂期以降も天候に恵まれたことから、登熟は「やや良」となり、10a当たり収量は581kgで、前年産に比べ54kgの増加となった。 ・作柄を示す農家等が使用しているふるい目幅ベースで算出した作況指数は108の良となった。（北陸農政局 12月2日付）
富山	<ul style="list-style-type: none"> ・作柄は、田植期から出穂期まで総じて気温が高く日照が多かったことから、全もみ数は「多い」となり、出穂期以降も平年に比べ気温及び日照時間が概ね上回って経過したため、登熟は「平年並」となったことから、10a当たり収量は566kgとなり、前年産に比べ7kg増加した。 ・作柄を示す農家等が使用しているふるい目幅ベースで算出した作況指数は106となった。（北陸農政局 12月2日付）
石川	<ul style="list-style-type: none"> ・作柄は、田植期から出穂期までは概ね天候に恵まれたことから、全もみ数は「平年並」で、出穂期以降も天候に恵まれたため、登熟は「やや良」となり、10a当たり収量は534kg(前年産に比べ12kg増加)となった。地帯別には、加賀が556kg(同12kg増加)、能登が505kg(同12kg増加)となった。 ・作柄を示す農家等が使用しているふるい目幅ベースで算出した作況指数は104となった。地帯別には、加賀、能登ともに104となった。（北陸農政局 12月2日付）
福井	<ul style="list-style-type: none"> ・作柄は、田植期から出穂期まではおおむね天候に恵まれたことから、全もみ数は「平年並」となり、出穂期以降も天候に恵まれたため、登熟が「やや良」となったことから、10a当たり収量は535kgとなり、前年産に比べ17kgの増加となった。地帯別には、嶺北が540kg(同17kg増加)、嶺南が506kg(同15kg増加)となった。 ・作柄を示す農家等が使用しているふるい目幅ベースで算出した作況指数は104となった。地帯別には、嶺北、嶺南ともに104となった。（北陸農政局 12月2日付）

収量構成要素、作柄及び品質等の概況	
長野	<ul style="list-style-type: none"> 全もみ数は、穂数がやや少なく、1穂当たりもみ数が平年並となったことから「やや少ない」となり、登熟は、9月中下旬の日照不足はあったものの、概ね天候に恵まれたことから「やや良」となった。 この結果、県の10a当たり収量は624kgで、前年産に比べ20kg増加した。なお、農家等が使用しているふるい目幅（1.80mm）で選別された県の作況指数は101となり、作柄表示地帯別では、東信で99、南信及び中信で100、北信で106となった。（関東農政局 12月2日付）
滋賀	<ul style="list-style-type: none"> 作柄は、7月以降概ね天候に恵まれたことから、1穂当たりもみ数がやや多くなったため全もみ数は「やや多い」となり、8月以降、高温・多照で経過したため登熟は「やや良」となったことから10a当たり収量は534kgとなり、前年産に比べ16kg増加した。 作柄表示地帯別の10a当たり収量は、湖南が543kg（前年産に比べ17kg増加）、湖北が515kg（同13kg増加）となった。（近畿農政局 12月2日付）
兵庫	<ul style="list-style-type: none"> 作柄は、6月中・下旬の日照時間が平年を下回って経過したため穂数はやや少なく、1穂当たりもみ数が平年並であったため全もみ数は「やや少ない」となったものの、8月が高温・多照で経過したため登熟は「やや良」となったことから、10a当たり収量は501kgで、前年産となった。 作柄表示地帯別の10a当たり収量は、県南が500kg（前年産に比べ2kg減少）、県北が497kg（同8kg減少）、淡路が517kg（同24kg増加）となった。（近畿農政局 12月2日付）
岡山	<ul style="list-style-type: none"> 穂数は、梅雨期の日照不足の影響から中北部では「少ない」、南部では「やや少ない」となったため、県全体では「やや少ない」となった。一方、1穂当たりもみ数は幼穂形成期の天候に恵まれたことから、地帯別・県全体ともに「やや多い」となった。このため、全もみ数は中北部では「少ない」、南部では「平年並」となり、県全体では「やや少ない」となった。 登熟は、中北部では、8月中旬以降が好天で推移し、中生品種で9月以降の日照不足の影響を受けたものの、全もみ数が少ないことによる補償作用もあり「良」となった。また、南部では、9月中旬以降の日照不足等から品種により登熟中期に影響があったものの、南部全体の登熟は「平年並」を確保し、県全体では「やや良」となった。 以上の結果、県の10a当たり収量は533kgとなり、作柄の悪かった前年産に比べ28kg増加した。作柄表示地帯別にみると、南部が542kg（前年産に比べ30kg増加）、中北部が517kg（同22kg増加）となった。 また、農家等が使用しているふるい目幅（中国地域は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した作況指数は101（平年並）となった。作柄表示地帯別においても、南部、中北部ともに101（平年並）となった。（中国四国農政局 12月2日付）
広島	<ul style="list-style-type: none"> 穂数は、6月が多雨・日照不足で推移したため、「少ない」となった。一方、1穂当たりもみ数は、7月上旬から8月上旬が高温・多照で推移したことに加え、穂数が少ないことによる補償作用が生じたことから、「やや多い」となった。このため、全もみ数は「平年並」となった。 登熟は、8月の日照時間及び気温日較差が平年を上回ったため、「やや良」となった。 以上の結果、県の10a当たり収量は531kgとなり、作柄の悪かった前年産に比べ24kg増加した。作柄表示地帯別にみると、南部が534kg（前年産に比べ26kg増加）、北部が530kg（同23kg増加）となった。 また、農家等が使用しているふるい目幅（中国地域は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した作況指数は102（やや良）となった。作柄表示地帯別においても、南部、北部ともに102（やや良）となった。（中国四国農政局 12月2日付）
山口	<ul style="list-style-type: none"> 穂数は、6月の天候不順により分けつが抑制され「やや少ない」となった。一方、1穂当たりもみ数は、穂数がやや少なくなったことによる補償作用や、中生種・晩生種の幼穂形成期が天候に恵まれたことから「やや多い」となり、全もみ数は「平年並」となった。 登熟は、早生種では、7月下旬から8月中旬が天候に恵まれ日照時間が平年に比べ多く推移したことから良好で、中生種・晩生種では、9月以降の日照不足により登熟が抑制されたものの、全体では「やや良」となった。 以上のことから、県の10a当たり収量は512kgとなり、作柄の悪かった前年産に比べ21kg増加した。作柄表示地帯別にみると、東部が490kg（前年産に比べ17kg増加）、西部が521kg（同24kg増加）、長北が506kg（同14kg増加）となった。 また、農家等が使用しているふるい目幅（中国地域は1.80mm）以上に選別された玄米を基に算出した作況指数は102（やや良）で、作柄表示地帯別にみると東部と西部が102（やや良）、長北が101（平年並）となった。（中国四国農政局 12月2日付）

収量構成要素、作柄及び品質等の概況	
愛 媛	<ul style="list-style-type: none"> ・穂数は、地帯別にはばらつきがあったものの「平年並」となった。一方、1穂当たりもみ数も同様に地帯別のばらつきがあったものの、幼穂形成期が好天であったため、県整体的には「やや多い」となった。このため、全もみ数は「やや多い」となった。 ・登熟は、9月以降が日照不足であったことや紋枯病の被害を受けたことから、早期栽培の多い南予は「平年並」となったが、比較的遅い品種は実入りが悪く県整体的には「やや不良」となった。 ・以上の結果、県の10a当たり収量は508kgとなり、作柄の悪かった前年産に比べ20kg増加した。作柄表示地帯別にみると、東予が497kg（前年産に比べ16kg増加）、中予が545kg（同17kg増加）、南予が488kg（同27kg増加）となった。 ・また、農家等が使用しているふるい目幅（四国地域は1.75mm）以上に選別された玄米を基に算出した作況指数は102（やや良）となった。作柄表示地帯別にみると、東予が101（平年並）、中予が102（やや良）、南予が103（やや良）となった。（中国四国農政局 12月2日付）
高 知	<p><早期栽培></p> <ul style="list-style-type: none"> ・穂数は、生育初期の高温により、生育期間が早く平年に比べ分けつ期が短かったことから、「やや少ない」となった。一方、1穂当たりもみ数は、穂数が少ないことから補償作用が働き「やや多い」となり、総じて全もみ数は「やや少ない」となった。登熟は、7月以降高温・多照で推移し、粒の充実が順調であったことから、「やや良」となった。以上のことから、早期栽培の10a当たり収量は481kg、作況指数は101（平年並）となった。 <p><普通栽培></p> <ul style="list-style-type: none"> ・穂数は、6月の日照不足の影響で分けつが抑制され、茎数がやや少ないことから、「やや少ない」となった。一方、1穂当たりもみ数は、7月下旬以降概ねおおむね高温・多照で推移したことと補償作用が働いたことにより、「やや多い」となり、総じて全もみ数は「やや少ない」となった。登熟は、9月以降日照不足の影響でやや抑制されたものの、粒の肥大は順調に推移しており、「やや良」となった。以上のことから、普通栽培の10a当たり収量は428kg、作況指数は100（平年並）となった。 <p><県及び作柄表示地帯別></p> <ul style="list-style-type: none"> ・県の10a当たり収量は458kg、作況指数は100（平年並）となった。作柄表示地帯別には、中東部が476kgで100（平年並）、西部が430kgで100（平年並）となった。（中国四国農政局 12月2日付） <ul style="list-style-type: none"> ・「コシヒカリ」の玄米の形質は、地域により差はあるものの、全体的に光沢は良好である。中山間部のは、粒ぞろいがやや不揃いであり、粒形もやや細く、小ぶりである。63.4%が2等で、落等理由としては心白・腹白の発現や充実不足である。出回り初期は、青未熟粒の混入がやや多かったが、8月下旬以降は、青未熟粒の混入は少なく、その他未熟粒の混入がやや多い。その他未熟粒の混入の程度は地域による差がある。胴割粒及び被害粒の混入は比較的少ない。胴割粒については、地域によりバラツキがある。着色粒は平均0.1%の混入で全体的に散見される程度である。（精米工 9月29日付）
福 岡	<p><福岡地帯></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数が「やや少ない」となり、その補償作用で1穂当たりもみ数が「やや多い」となったが、「やや少ない」となった。登熟は、早生種の夢つくし等で出穂以降、高温多照に経過したものの、中生種のヒノヒカリで出穂以降、日照不足で経過したことから、「平年並」となった。このことから、10a当たり収量は474kg（作況指数99）となった。 <p><北東部地帯></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数が「やや少ない」となり、その補償作用で1穂当たりもみ数が「やや多い」となったことから、「やや多い」となった。登熟は、早生種の夢つくしで出穂以降、高温多照に経過したことから、「やや良」となった。このことから、10a当たり収量は499kg（同104）となった。 <p><筑後地帯></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数が「やや多い」となり、1穂当たりもみ数が「平年並」となったことから、「やや多い」となった。登熟は、ヒノヒカリの出穂以降、曇雨天日が多く、日照不足で経過したことから、「やや不良」となった。このことから、10a当たり収量は512kg（同98）となった。 <p>以上の結果、県の10a当たり収量は平年並の501kg（同100）となった。</p> <p>（九州農政局 12月2日付）</p>
熊 本	<p><県北地帯></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数が「やや多い」となり、その相反作用で1穂当たりもみ数が「やや少ない」となったことから、「やや多い」となった。登熟は、病虫害の発生は平年より少なかったものの、出穂以降、やや日照不足で経過したことから、「やや不良」となった。このことから、10a当たり収量は542kg（作況指数102）となった。 <p><阿蘇地帯></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数及び1穂当たりもみ数が「平年並」となったことから、「平年並」となった。登熟は、5月早植えのコシヒカリについては、出穂以降、高温多照で経過し、その他の品種については、出穂以降、やや日照不足で経過したものの、病虫害の発生が平年より少なかったことから、「やや良」となった。このことから、10a当たり収量は522kg（同104）となった。 <p><県南地帯></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数は「平年並」となったが、1穂当たりもみ数が「多い」となったことから、「やや多い」となった。登熟は、1穂当たりもみ数が多いことによる相反作用と、出穂以降、やや日照不足で経過したことから、「やや不良」となった。このことから、10a当たり収量は521kg（同103）となった。 <p><天草地帯></p> <ul style="list-style-type: none"> ・全もみ数は、穂数は「平年並」となり、1穂当たりもみ数は「やや少ない」となったことから、「やや少ない」となった。登熟は、早期栽培では登熟後半が好天に恵まれたものの、普通栽培では出穂以降、やや日照不足で経過したことから、「平年並」となった。このことから、10a当たり収量は422kg（同97）となった。 <p>以上の結果、県の10a当たり収量は平年を上回る527kg（同102）となった。</p> <p>（九州農政局 12月2日付）</p>

収量構成要素、作柄及び品質等の概況	
宮 崎	<p><早期栽培水稻> ・作柄概況 全もみ数は、1穂当たりもみ数は「平年並」となったが、穂数が「少ない」となったことから、平年に比べ「少ない」となった。登熟は、幼穂形成期から出穂期にあたる5月下旬から6月下旬にかけては日照時間が平年を下回りましたが、7月上旬以降の日照時間が平年並ないしやや上回って経過したことや、全もみ数が少ないことによる補償作用から、「やや良」となった。このことから、10a当たり収量は平年を下回る461kg（作況指数97）となった。</p> <p><普通栽培水稻> ・作柄概況 （広域沿海地帯） 全もみ数は、穂数及び1穂当たりもみ数が「やや多い」となったことから、「多い」となった。登熟は、出穂期にあたる8月下旬は高温多照であったものの、9月以降は日照時間が平年を下回って経過したことや、全もみ数が多かったことから、「やや不良」となった。このことから、10a当たり収量は492kg（同104）となった。</p> <p>（広域霧島地帯） 全もみ数は、穂数は「やや少ない」となったが、その補償作用で1穂当たりもみ数が「多い」となったことから、「やや多い」となった。登熟は、9月以降、日照時間が平年を下回って経過したものの、病虫害の発生が平年に比べやや少なかったことから、「平年並」となった。このことから、10a当たり収量は543kg（同102）となった。</p> <p>（西北山間地帯） 全もみ数は、穂数は「少ない」となったが、その補償作用で1穂当たりもみ数が「多い」となったことから、「やや多い」となった。登熟は、出穂期にあたる8月下旬は高温多照で経過したものの、9月以降は日照時間が平年を下回って経過したことや、1穂当たりもみ数が多かったことから、「やや不良」となった。このことから、10a当たり収量は498kg（同102）となった。</p> <p>以上の結果、県の普通栽培水稻の10a当たり収量は平年を上回る523kg（同103）となった。</p> <p>（九州農政局 12月2日付）</p> <p>・「コシヒカリ」の玄米の形質は、光沢・粒形は平年並であるが、早場米特有の早刈りと思われるものもあり、収穫日・生産者によるバラツキが感じられる。また、出穂期以降も天候に恵まれたため、全体的に白未熟粒及び青未熟粒の混入は少ないが、水不足気味だったためか、死米の混入は青・白ともに平年よりやや多い。その他未熟粒の混入は、全体的には平年並だが、地域による差が見られる。被害粒・着色粒の混入は少ない。胴割粒の混入はやや多いものがあり、これも死米と同様の影響によるものと思われる。（精米工 9月9日付）</p>
鹿 児 島	<p><早期栽培水稻> ・作柄概況 全もみ数は、田植期の違いにより地帯間で差がみられるものの、県平均では穂数及び1穂当たりもみ数が「平年並」となったことから、「平年並」となった。登熟は、登熟前半までの日照不足及び風雨や登熟後半の高温、また、一部地帯でのいもち病等の拡大も影響したため、「やや不良」となった。このことから、県の早期栽培水稻の10a当たり収量は平年を下回る429kg（作況指数96）となった。</p> <p><普通栽培水稻> ・作柄概況 （薩摩半島地帯） 全もみ数は、穂数が「やや多い」となり、1穂当たりもみ数も「多い」となったことから、「多い」となった。登熟は、9月以降、台風や秋雨前線の影響で日照時間が平年を下回って経過したことで全もみ数が多いことによる相反作用が助長され粒の充実が悪くなり、「やや不良」となった。このことから、10a当たり収量は489kg（同103）となった。</p> <p>（出水薩摩地帯） 全もみ数は、穂数が「やや多い」となり、1穂当たりもみ数が「平年並」となったことから、「やや多い」となった。登熟は、9月以降、台風や秋雨前線の影響で日照時間が平年を下回って経過したことに加え、いもち病の進展やトビイロウンカによる埋枯れ等により粒の充実が悪くなり、「やや不良」となった。このことから、10a当たり収量は504kg（同100）となった。</p> <p>（伊佐始良地帯） 全もみ数は、穂数が「平年並み」となり、1穂当たりもみ数が「多い」となったことから、「多い」となった。登熟は、いもち病の進展、トビイロウンカによる埋枯れの発生や、9月以降、台風や秋雨前線の影響で日照時間が平年を下回って経過したことで、全もみ数が多いことによる相反作用が助長され粒の充実が悪くなり、「不良」となった。このことから、10a当たり収量は511kg（同101）となった。</p> <p>（大隅半島地帯） 全もみ数は、穂数が「少ない」となり、1穂当たりもみ数が「やや多い」となったことから、「やや少ない」となった。登熟は、9月以降、台風や秋雨前線の影響で日照時間が平年を下回って経過したことに加え、台風による冠水や倒伏等も影響したものの、全もみ数がやや少ないことによる補償作用から、「やや良」となった。このことから、10a当たり収量は469kg（同98）となった。</p> <p>以上の結果、鹿児島県の普通栽培水稻の10a当たり収量は平年並みの498kg（同100）となった。</p> <p>（九州農政局 12月2日付）</p>

注1：自治体等公表資料については地方自治体及び出先機関等が公表している資料から抜粋、日付は公表日。

注2：農政局が公表している資料の「前年度比」は、確定値との比較となっている。

注3：（精米工）とあるものは、一般社団法人日本精米工業会が提供している「米質概況情報」から抜粋。但し「米質概況情報」は一般社団法人日本精米工業会が正会員精米工場から得たサンプル（玄米）を測定したものであり、母集団として産地の評価を決めるものではない。

注4：更新箇所については下線で表した。

参考資料

平成28年産水陸稲の収穫量(農林水産省、北海道農政事務所、東北農政局、関東農政局、北陸農政局、近畿農政局、中国四国農政局、九州農政局)、
平成27年産水陸稲の収穫量(農林水産省)、
平成28年産米の農産物検査結果(速報値/平成29年3月31日現在)(農林水産省)、
平成27年産米の農産物検査結果(速報値/平成28年3月31日現在)(農林水産省)、
平成29年産米の都道府県別の生産数量目標等(農林水産省)、
平成28年産米の都道府県別の生産数量目標等(農林水産省)、
玄米品質概況(平成28年産)(9/9、9/29、10/17)(一般社団法人日本精米工業会)

H28水稲作況(成熟期)(青森県産業技術センター農林総合研究所 11月24日)、
稲作情報総括号(石巻農業改良普及センター 2月3日)、
登米地域の稲作通信総括号(登米農業改良普及センター 2月13日)、
栗原の稲作通信平成28年第8号(総括号)(宮城県栗原農業改良普及センター 1月10日)、
平成28年産大崎稲作情報総括号(宮城県大崎農業改良普及センター 12月27日)、
稲作情報総括号(本吉農業改良普及センター 12月12日)、
生育状況の情報(秋田県ホームページ「こまちチャンネル」<http://www.e-komachi.jp/> 11月18日)、
農研速報(水稲の生育状況)(11月8日現在、龍ヶ崎市)(茨城県農業総合センター農業研究所 11月16日)、